

# 倉重篤郎のサンデー時評



no.17

## 夏休みの宿題で

## 722本の日本改革案を作ろう

1972年、田中角栄の『日本列島改造論』が出た。時の日本国民の平均年齢は32歳。人間の肉体でいえばまだ青年期である。元気な日本経済を背景に新幹線、高速道路の整備や地方中核都市への工場誘致など列島改造を唱えた。

それから21年後の93年、小沢一郎が『日本改造計画』を世に問うた。平均年齢は39歳。冷戦とバブ

ルの崩壊という歴史的節目を越え、成人期にさしかかった日本の針路として、自己責任原則の徹底と国際社会の平和と安定に寄与する普通の国となるよう求めた。

いずれも、時代の要請に合わせ、時の権力者が、周囲の官僚、学者の知恵を集めて練った中長期的国家改革ビジョン。話題性のみならず時代の方向性を的確につかんで

おり、両著ともに100万部を超える、この種の本としては珍しいロングセラーとなっている。

そして、小沢本からまた21年、65歳以上の高齢者が4人に1人という超高齢化社会の入り口に立つた今、前二作を強く意識した新たな国家改革計画本が出版された。

小川淳也著『日本改革原案 2050年成熟国家への道』（光文社）がそれだ。永田町の実力者どころか、当選3回、43歳のひよっこ民主党衆議院議員の作。だが、その大風呂敷はなかなかのものだ。

小川本は、一言でいえば、人口問題、つまり2050年には65歳以上が社会の4割を占める急速な少子高齢化の進展と、毎年100万人ずつの単位で減っていく人口総量の急減という二重の変化を、国内最大の構造変化であり、かつ、不可避で冷徹な事実であり、さらには、経済、社会に与える衝撃が他と比べようもなく巨大な問題としてとらえ、これを政治的にどう乗り越えていくか、を巨視的、根源的に考え抜いたものである。

この問題こそが、全地球的な環境・資源制約と運動し、日本経済の低成長、マイナス成長化を余儀

なくし、日本の経済社会の根幹である財政・社会保障制度を持続困難化させている日本政治が全力を挙げて取り組むべき本質的課題であり、これまで同様マイナーチェンジの積み重ねで実質先送りしていかば、いずれ日本は破綻国家の道を歩まざるを得ないが、逆に日本が課題先進国として大胆な国家改造に踏み切れば、いずれ同じ問題に遭遇する国際社会に対する最大の貢献になる、というのだ。

### 2050年代

### 人口は1億を割る

### その日に向けて、今…

確かに、この不都合な真実に私たちはまともに向き合ってこなかった。小川氏によると、それはある意味、楽観論に逃げ込み、破綻するまで気づかないふりをして無謀な戦争に突入していった戦前と同じではないか。破綻がすべてをリセットするという傍観者の視点が行っている、ともいう。

小川氏がこの問題にこだわるのは、日本の人口が1億人を超えた1970年代に生まれ、1億人を切ることになる2050年代に人

生を終える世代にあるからだ（2004年の1億2784万人がピーク）。前半40年を史上最後の人口増大曲線の中で、後半40年を最初の減少曲線の中で生きることになるこの世代には、上昇曲線の中で作られた社会を、下降曲線の下でも持続可能な新しい時代のものに作り替える義務がある。80代の先輩諸氏と0歳の赤ん坊のちょうど真ん中に立つことから、両者の対話を促し、解決策を練り、出口を模索する歴史的使命と世代的宿命を負う、というのだ。

小川ビジョンは、四つの処方箋を提示している。

人口構造の激変に対しては雇用、年金、医療、財政を含めたあらゆる給付と負担の構造を置き換

える。高齢者が現役引退する従来型就労構造を革命的に変え、生涯を通じて自助自立を促す「生涯現役」という新しいコンセプトを導入、それを支える雇用、社会保障制度を具体的に再設計した。例えば、社会保障給付であれば「2割圧縮、消費税率25%、年金制度であれば「最低保障7万円、月収17万円からは支給停止」といった激辛案が例示されている。

人口総量の減少には、日本列島を種分化、国際化するとの考えの下、入国管理政策や港湾空港といったインフラ対策を充実させ、教育や社会的包摂を徹底させた開放政策に転換する。

資源・環境制約からくるエネルギー問題に対しては、化石燃料な

ドストックの太陽エネルギー依存から太陽光、風力、人工光合成、農業を含めたフローの太陽エネルギー・多面活用に大きく舵を切る。

国内政治体制の改革としては、国会の機能を実質化、まずは党議拘束をはずして議員同士の真剣討議の場に変えるほか、選挙の時期を集約、投票年齢の18歳への引き下げ、投票の義務化などを挙げていく。いずれも、2050年に向けて20年以降から10年越しで変えていこう、というプランである。

「年金の抑制か、消費税上げか、という局地戦的な利害衝突ではなく、大義に立った国家の舵取りを議論する土壌を日本に作りたい。それは日本のためであり、世界のためである。という。まあ、大上

段で憎越至極なんですけど……」

後援会組織を中心に3年間徹底議論して作り上げた。各党の若手議員から助言、激励を受けた。ビジョン本の先人にあたる小沢氏にも「先生の著書を時代の変化と共に乗り越える本を書かせていただきたい」と仁義を切った。

皆さんはこの提言をどう受け止めるか。私はその大局観、本質論に強く惹かれるものがある。衆院議員480人、参院議員242人にお願したい。この手の改革ビジョン（小沢氏には『日本改造計画』の改訂版）をそれぞれに考えて抜いて選挙民に示してほしい。国会も選挙もないこの夏こそ好機である。計722本の改革案が出そう。例えば政治の風景が変わる。

猟師の知恵に思わず脱帽！こんな豊かで、究極の生き方があるなんて。

# 猟師の肉は腐らない

## 小泉武夫

岩魚の水音焼き、兎の灰燼して何？ 猟師の暮らしは、様々な知恵と工夫がてんこ盛り。命の連鎖も身をもつ学んだ、驚きの体験記。

猟師の知恵と工夫に学ぶ



●定価(本体1400円+税) 新潮社

倉重篤郎 (くらしげ あつろう) 1953年7月東京生まれ。78年東京大教育学部卒。毎日新聞入社、水戸、青森支局。政治部、経済部。2004年政治部長、11年論説委員長、13年専門編集委員。